２０２４年度　町田市里山環境活用保全計画推進委員会　議事要旨

【会議日時及び場所】
日時　２０２５年2月２５日（月）１０時～１１時５５分
場所　町田市庁舎　８階　８－１会議室（リモートによる実施）

（出席者）（敬称略）
■委員
図司直也（委員長）、寺田徹（副委員長）、柏木千春、滝口進、木目田典子、新倉敏和
■事務局
粕川北部農政担当部長、林田課長、牛腸担当課長、喜多里山担当係長、秋山担当係長、小島主任
■傍聴者
０人

【資料】
・　次第
・　資料１　　町田市里山環境活用保全計画推進委員会設置要綱
・　資料２　　町田市里山環境活用保全計画推進委員会委員名簿
・　資料３－１　小山田エリアにおける拠点施設整備の進捗状況について
・　資料３－２　小山田エリアにおける里山環境再生・活用拠点施設のあり方に関する基本構想（概要版）
・　資料４－１．２　重点事業進捗状況確認シート
・　資料５－１．２　リーディングプロジェクト進捗状況確認シート

【議事要旨】
事務局から
２０２４年度の事業の進捗について
・　小山田エリアにおける拠点施設整備の進捗状況について
・　重点事業の進捗について
・　リーディングプロジェクトの進捗について
・　質疑応答及び意見交換

１　開会挨拶
・　経済観光部北部・農政担当部長からあいさつ

２　委員長・副委員長の選出
・　図司委員を委員長に選出
・　寺田委員を副委員長に選出

３ 委員長・副委員長あいさつ
・委員長、副委員長からあいさつ

４　議事
１．小山田エリアにおける拠点施設整備の進捗状況について
事務局から資料１を基に説明

・　委員	拠点施設をまとめて整備するのではなく、ある程度分散させるという事について、そうなると、当初の里山環境活用保全計画で考えていた内容とだいぶズレが出てきてしまう。そもそも分散させる施設にどういうことを求めるのか、どれ位の施設数で作るのか。

	元々想定していた拠点施設のイメージから全く変わってきてしまうと思うので、分散型にする場合の現状のイメージをもう少し教えて欲しい。地域の方々からの要望という話だが、これまで考えてきた拠点施設の考え方という観点から、分散型にして本当に施設が機能するのかも含め、話して欲しい。
・　事務局	拠点施設の分散整備については、施設間が限りなく近い場所に整備したいと考えている。 集客機能を持つ施設については市街化区域内の、できるだけ里山に近い場所に整備し、そこから比較的近い市街化調整区域に木材関連の加工場のような機能の施設を整備する事を考えている。
・委員	拠点施設の持つ機能をばらばらにして、一番良いロケーション・機能に適した場所に整備するという事か。集客施設は市街化区域内につくるという事か。
・　事務局	基本構想に示す方針の機能でいうと、方針１や方針３、方針４にある、人を集める事を目的とした機能はできるだけ里山に近い市街化区域内に整備したい。 木材の加工を行う工場のような機能については市街化調整区域内に整備するというイメージである。
・　委員	整備の内容もだいぶ変わってくるし、事業費や採算性という別の観点からも検討し直さないといけないと思うが、どんでん返しという形になってしまうのか。
・　事務局	どんでん返しという形ほどの再検討にはならない。 市街化調整区域内に整備するということはハードルが高いという事を想定してはいたが、やはり集客を目的とした施設を市街化調整区域内で整備することは理解を得られないという事が分かってきたため、そこが分散型の決め手になった。地域の方々からも一カ所に整備するのではなく分けて整備しても良いのではないか、その方が地域全体の役に立つのではないか、といったご意見も多数あったため、この様な方向性に修正している状況である。
・　委員	承知した。今の話を伺うと、ギリギリ市街化区域みたいな所に人が集まり、買い物などができる様なスペースを作って、里山の少し奥まった所には里山関連の木材加工等ができる機能を置く。ワークショップの機能や地域の方々がちょっとした買い物ができるような利便性に関する機能については変わらず山側に置かないという判断で良いか。 市街化調整区域内にちょっとした買い物ができる機能を持つ施設を整備することは、法令上難しいのか。 また、理解が得られないという事は、地元の人が作って欲しくないという事なのか。
・　事務局	できるだけ里山に近い市街化区域内でないと整備は難しいと考えている。法令上の関係で、理解が得られないという事である。

・　委員	道沿いに市街化区域があるが、その様な道沿いにある市街化区域内の土地を使うことも駄目という事であれば、できる事もかなり限られてくるし、ロケーションもそれで決めざるを得ないので、その辺りの整理が必要だと思う。 拠点施設の構想には施設の機能が盛り沢山で、構想の方針に示す機能全てを集約した複合施設をなるべく里山側に整備するという事だったが、そもそも都市計画法令上できないという話であれば、それを前提にやるしかないと思うが、行政上の法規の整理なのでなるべくはっきりさせて欲しい。
・　委員長	当然都市計画との整合性を持たせないといけないが、できるだけ里山のある市街化調整区域に近い所で人に沢山関わって欲しいという地元の皆さんからの思いは北部丘陵活性化計画の時代から引き継いでいるので、具体的な都市計画のゾーニングを見ながら議論せざるを得ないと思う。
・　委員	拠点施設を分散配置した際、施設間の回遊については徒歩圏内で可能なのか。
・　事務局	可能な限り徒歩圏内で整備したいと考えている。
・　委員	もし歩いていけないとなると、集客力の差が出てしまう。そうなると結局、事業者選定においても事業者が手を上げにくくなりそうである。拠点施設の本来の目的から外れないようにしなくてはいけない。 分散配置を行った場合に、駐車場容量の関係と渋滞対策がややこしくなりそうなロケーションだと感じたので、その辺りも民間事業者の頭を悩ませるところかなと思う。
・　事務局	基本的には拠点施設へ車で来ると想定している。そうなると当然拠点施設の周りに車を駐車できる場所が必要になり、地元の方もそれを求めている。ただ、おっしゃる通りこのエリアの道路はそれほど整備されておらず、大きな施設を整備していくと渋滞といった課題が発生してしまう可能性がある。現時点で具体的な駐車台数は分からないが、規模感は考える必要がある。
・　委員長	今後、拠点施設の基本計画を策定する際には、既に場所がある程度決まっている状態で、それを基に民間事業者へ計画内容を示していくという流れになるのか。
・　事務局	そうである。基本構想では３つの路線のどこかに整備したいと示したが、基本計画ではきちんと場所を決めたい。
・　委員	事業採算性が課題という視点で見ていくと、林業や山林の整備・体験などをやって果たして事業採算が取れるのか。ナラ枯れ被害もあるし、奥多摩の山林と違って里山の山林なので木材はそれ程量がないと思う。今、山の中は荒れ果てた状態なので、例えば道路

	や大型車が入らないと木は切って運べないという課題もあると思う。木材加工設備を作ったりという事よりも、もう少し体験工房的な施設で良いのではないか。
・　委員長	事業採算性についてはサウンディング調査でも質問が来ている。調査の内訳について説明が欲しい。
・　事務局	現時点においては市内の里山にある資源量の限界から、当初の想定よりも難しい部分もあると考えている。一方で木材を使って色々な体験をし、里山を知ってもらうという事に関心を持っていただいている事業者もいる。小山田の里山にどれくらいの資源があるのかをきちんと出し、何ができるのかを明確にしたい。そうすることで拠点施設に必要な設備の規模感も見えてくると考えている。
・　委員	地元の経済は今、物価や賃金の上昇によって中小企業は厳しい状況にあると感じている。この様な取り組みに協力をしてもらうという点で考えると、業績の良い企業であればＳＤＧｓや地域貢献といった業績以外の部分でアピールをしていこうという動きがあるので、環境対策等といった事に興味がある企業を見つけて行くという事も非常に良いのではないかと思う。
・　事務局	企業と話をさせていただく中では環境やカーボンニュートラル関係の部分について何かできるかな、という話はいただくこともあるので、企業との連携にはその様な視点が重要だと思っている。
・　委員	サウンディング調査の内容を見ると林業や木材・製材関係の事業者にも話を聞いているという事だが、要するに製材所や土場の様なものを山側に整備して木材を板に加工した後、それを使って加工体験やＤＩＹをするというイメージなのか。加工体験などを行う機能は飲食機能と併設のようなイメージで、そこで施設機能を分けているのかと感じたが、どうか。
・　事務局	おっしゃる通りである。山側の施設で木材を確保し、それを人が集まる施設に持っていき、木材の加工を体験してもらう様なイメージを持っている。
・　委員	そうすると製材加工現場やバイオマス収材センターの様なイメージになると思うが、そういった施設の運営と、体験や飲食施設などの運営は考え方が全く異なり、運営事業者も異なってくると思う。そこをはっきり分けないと、おそらく民間事業者としても何を求められているのか分からないのでは。 木材を仕分けして製材していくという事であれば、工場の規模感によって事業採算性がほぼ決まってくると思うが、資源量を考慮するとこのエリアではそれ程木材が出てくるとは思えない。町田市以外の木材を引っ張ってくる様な事になってしまうかもしれない。 やはりどういう規模で、何を集めるのかというイメージをもっと明確にしないと、プ

	ランが立てられないと思う。かつ、その様な施設を整備するに当たって、製品としての板材の扱いを施設運営のメインに考えてしまうと破綻してしまうと思われる。端材など、チップに出来る様なものを燃料として売るとか、市内のバイオマス関連施設・ペレットの材料にするなどといった形で、山から出てきたものをお金に変えていく施設にしないことには採算が合わないと思う。これまではその様な検討イメージはなく、何となく体験の場や小さい製材場があって、というイメージのまま来てしまったので、しっかり土場と製材、加工施設を分けて整備するのであれば、独立させてしっかり採算性を考えないといけないのではないか。また、町田市の広葉樹を活用した林業みたいなものを考える中で、別の取り組みと組み合わせる事も検討に入ってくるのではないかと考える。 一方で、飲食と加工体験ができる施設は、例えば市民・都市部の方々に来てもらい、自分の家の家具といった物を町田市産の木材でＤＩＹするといった様に比較的イメージしやすい。そこでスペースチャージや体験参加に対して指導料を取ったりしながら施設を使っていただく。産出された木材を売るだけでは事業採算性が合わないと思うので、やはり子ども連れで半日くらいかけて体験の部分にお金を使っていただくというイメージかなと思う。拠点周辺の里山もモデル地区的に整備しておけば、そこで子どもを遊ばせたりもできるので、里山の空間とものづくりの体験をして、飲食もして帰るようなイメージが出てきて分かりやすい。 これは私の勝手なイメージだが、全体的に利用イメージがごちゃごちゃしているので、整理するための参考になればと思う。
・　委員	私はツアー事業などを仕事で担当しており、月に３，４回まち歩きや里山歩きをさせていただいているが、参加者のほとんどが６５歳以上で７０歳代前後の方が最も多い。シニア世代の方はとても自立していて好奇心も向上心もお持ちでいるので、里山も恐らく大好きだと思われる。 多様な方の関わりという事を考えるのであれば、５０歳代前後のミドル世代や６５歳以上のシニア世代の方が興味を持つような体験施設という事も視野に入れても良いのではないかと思う。
・　事務局	●●委員のご意見について、山側に整備する木材加工の施設はまだまだ整理ができていないことが今回はっきりと分かった。人を集める施設はどこまで木材を使ってできるのかという課題があると思う。 ●●委員のご意見についてもごもっともであり、シニア世代・ミドル世代の方々には里山へ関心を持っていただいていると感じる。より興味関心を持っていいただき、継続して来ていただきたいので、年齢に限らず、大人から子どもまで関心を持っていただけるようにしていきたい。
・　委員	木材加工について、都市部でも結構な木材が街路樹の剪定・更新に伴い出てくる。都市林業的な視点も含め、街路樹も町田の木材としてきちんと価値のあるものとして、市民に還元するという意味で活用していくことは、北部丘陵に限らず当てはまってくるのではないかと思う。街路樹は一定量が一定のタイミングで出てくるものなので、里山の様

	に管理の手が入らないと木材が出てこないというものでもない。製材を行うにしてもある程度の量の資源が入ってこないと施設計画も立てられないので、街路樹活用の事業との連携や、街路樹更新計画とのタイミングも考えながら検討すると良いのではないか。
・　事務局	里山の木だけでなく拠点施設では街路樹や公園などの公共施設も含めて一緒にやっていきたいと考えている。街路樹をはじめとした公共施設で発生した伐採木の活用について、庁内で連携して取り組んでいく。
３．重点事業の進捗について 事務局から資料４－１．２を基に説明	
・　委員	農業協同組合のシイタケ部会との連携について、先日、シイタケ栽培に使用する原木の切り出し作業を実施した。現在、町田市内でシイタケを農協に出荷している人は２人しかいない。皆さん高齢で木の伐採はできず長野県や遠方から原木を注文してシイタケ栽培を行っている状況である。 昔は自分達で山林の樹木を伐って出荷していたものが今はなくなってしまい、山も荒れている状況であることを皆さんに知っていただきたい。今回の様に原木が手に入れば、かなりシイタケ原木についても普及ができるのではないかと思う。
・委員長	東日本大震災の影響で、東北から原木の仕入れが厳しくなり、一時期は価格も上がった。長野県など都外から原木を購入しているとの事だが、地産地消で地元の木材を使えるかという話にもなってくるが、コストやその後の状況はどの様になっているのか。
・委員	ご指摘の通り、福島県からの仕入れができなくなってしまったので長野県などから仕入れている状況だが、採算性で言うとそれ程農家の人の儲けになるという程ではない。ただし、原木の輸送費がなくなれば農家の方の所得増大に繋がるのではないかと考えている。
・委員長	市民の皆さんの関りがあって、地元で作られたシイタケを大事に食べていただければと思う。
・事務局	東京都の森林事務所によると、最近は原木を県外に出さなくなってきている傾向があり、都内でシイタケを作っている方々も困っているのではないかという事で、都内で何とか原木を確保し流通していくことを目的に補助制度を立ち上げたそうである。本件はその制度の中で実現したものである。 町田市内の農家さんの中で上手く使っていただけるような循環ができるのではないかと期待している。
・委員	状況確認シートの評価も二重丸となっており、全体としてかなり進捗は良いと思う。 拠点施設整備と関連して考えていただけたらという点として、山林・竹林の整備という事で今回新たに整備するエリアを増やしたという事だが、今後、拠点施設の場所を検

	討していく上では拠点施設の裏山に当たる場所を放置せず、管理の方針を決めたり市民参加型・団体参加型で取り組むなど、きちんと管理して欲しいと考える。奈良ばい谷戸の活動の様な建付けになっていることが重要だと思う。拠点施設と里山の抱き合わせという事を意識して考えていただきたい。
・事務局	基本構想に参考事例として掲載した鴨川市の施設では、施設から見える外の景色が綺麗で良かった。これから整備する拠点施設から見える里山の景色がうっそうとしたものではまた来てくれる施設にならないと思うので、綺麗にしていくべき場所として事業者や地域と一緒に良くしていく必要があると考える。
・委員	重点事業のシートに目標値と実績値が記載してあるが、持続的な活動をしていくためにはやはり若い世代の参画も意識しておいた方が良い。 団体数のカウントについて、目標値は良いが、その中身に関しては例えば小・中・高生や大学生の参画状況、２～３０代の社会人の動きはどうなっているのかといった事も追跡しておいた方が良いと思った。 また戦略的な情報発信について、報告内容が記載されているが、果たしてこの内容が戦略的なのか。普通の情報発信の結果という気がしてならない。参画者の増加・特に若い人たち、例えば小中学生を増やしたい場合にはどう情報発信すべきなのかと考えるのが戦略である。イベントに集客をするためのプロモーションや、ＳＮＳ配信も報告されているが、ＳＮＳ配信については団体が行った結果を報告しているだけである。もう少し戦略的な情報発信とは何か？という所をこだわって欲しい。
・事務局	整理していく必要があると感じている。
・事務局	今年度はプレスリリースを多く行えたと感じている。町田市が行うプレスリリースについては、市民団体の活動についてもリリースできるようになった。その結果、取材に繋がるといった連鎖反応が起こった。 戦略的ではなかったが、発信して分かったこともあるので、次年度はもう少し戦略的に行いたいと思う。
・委員長	色々な取り組みを行うことで、ターゲティングはだいぶ見えてきていると思うので、戦略を打って確実性を増していく事に私も同意である。少し教育的な要素が弱かったかなと私も感じた。玉川大学との連携もあったが、この辺りは学生のマインドも上がってきており、里山に関してはうちの学生も議論が深まって関心を寄せている。若い世代に向けた発信は大事だと感じた。
４．リーディングプロジェクトについて 事務局から資料５－１．２を基に説明	
	意見なし。

５．２０２４年度町田市里山環境活用保全計画推進委員会　委員長総括	
・　委員長	本日の内容について全体を通して、各委員より今後に向けてご意見・ご感想をいただきたい。
・　委員	エリアごとの活動を拝見させていただき、大変感銘を受けた。 中でも竹林整備は里山の大きな課題であるので、竹を切る爽快感などの味わいをもっと具体的に伝えていきたいが、里山づくりは大変長い年月を要するため、完成まで子どもたちが見れるような雰囲気づくり・引継いでいくことができればもっと里山に関心を持ってくれるのではないかと感じた。
・　委員	町田市の里山の取り組みがメディアに紹介されたりする機会が非常に多くなっていると思う。先日も日本経済新聞に町田市の里山に関する記事が掲載されていたが、町田でこの様な取り組みが行われている事について全国的にも注目されている、珍しい取り組みなのだと思う。全国的に興味を持たれているという事が素晴らしいと思った。 また、色々な地方に行かれる方から、町田から来たというと必ずＦＣ町田ゼルビアの名前が出てくると聞く。町田という名前がＪリーグのおかげでかなり広がっている。今回、新聞記事に紹介された事によって里山の取り組みも非常に注目されるのではないか。里山の来訪者３５，０００人という数字も、私には多いのか少ないのかは分からないが、増えてくれれば良いと思う。人が増えればビジネスも成り立つし、飲食の必要性もビジネスに繋がる。里山に関する取り組みを継続しながら広げていく事で、ビジネス的な繋がりにも持っていければ一番良い。
・　委員	皆様がこの地域のためにやってきた事について、感銘を受けた。 小山田エリアの拠点施設について、今後検討を進めていく事になると思うが、その中では直売所といった機能も整備されると思う。農家の方が今、これだけ減ってきている状況でこの拠点施設にも野菜を出荷するようになってしまうと、農業協同組合で運営する直売所への野菜出荷量が少なくなってしまうのではないかと懸念している。そのため、小野路宿里山交流館と同じ位の売り場面積にぜひしていただきたいとお願いしたい。
・　委員	本日は各事業の進捗状況を確認し、概ね良好な状況にあるという事を確認できた。 私自身は観光を専門領域としているので、拠点施設整備に関してはやはり今回の中で関心を持って見ていきたいと思って話を伺っていた。体験交流の事業や飲食事業というのは現在の拠点施設の目的を考えると、市民などできるだけ多くの人に向けた価格設定となり、単価が低くなってしまう。回転率を上げるような事業をやっていくのだと思うと、体験交流事業だけで稼ぐのは結構厳しい。 民間事業者やＮＰＯ団体などを巻き込みながらやっていくことになるのかもしれないが、どうやっていくのが一番良いのかなと。体験交流については事業の単価を安くするのであれば、回転率を上げるために大型バスが駐車できる様な駐車場を考えなくてはいけないので、その辺りが悩ましいと感じた。プロジェクトを一緒にやっていく事業者の

	設定などにも大きく関わってくると思うので関心がある。
・　委員	進捗の全体像が良く分かった。 全体を通じ少し気になった点として、里山に関わるプレイヤーをもう少し若い世代かつライト層というか、「入り口」として入りやすい事を強化する必要があるのではと感じた。「入っていたいだ後に更に体験して」というステップアップを様々な活動に反映していく必要があると思う。基本的にはベテランのシニア世代のボランティアの方々に取り組みを支えていただく部分がありつつも、若い世代も取り組みに入ってくることによって、技術継承に繋がる。 いきなり山に入って木を伐るのはかなりハードルが高いと思うが、竹林などは広葉樹や針葉樹といった木本類に比べれば維持管理が簡単である。木工体験も、子ども達や若い世代をひきつけるコンテンツに十分なるのではないかと思う。 今後、拠点施設の配置や機能、全体的なデザインなどを検討していく事になると思うが、その際に「このスペースはこういった人に来てもらいたい」といったターゲットがある程度明確でないと、誰にとっても何となく良い・総合的に言うと及第点以下という様な施設ができかねない。特に民間事業者に運営に携わってもらうことを想定しているのであればそこが明確でないと、人を呼び寄せる事にも採算性にも繋がらない。ある特定の誰かのための施設にするという事ではなく、これまで活躍されてきシニアはこういう役割で、マウンテンバイクとか日常的に里山を利用されている方はこういう役割、といったそれぞれの役割と施設機能に対するターゲットを明確にする事で、拠点施設整備にも繋がってくると思う。
・　事務局	それぞれ委員の皆様から多角的なご意見をいただき、今後の検討に大いに参考になると感じている。 ●●委員からは、竹林整備・特に子どもたちに体験してもらいたい・それが長い年月で体験していただく必要性についてご意見いただいた。子供のころの原体験というのは将来どこかで影響が出てくるので、子ども達にいかに里山を体験してもらうかという事は考えていきたい。２０２５年度は、より対象エリアに近い場所の子ども達をターゲットにワークショップをやってみたいと考えている。 ●●委員からは、日本経済新聞のご紹介をいただいたが、本件もプレスリリースの発信から取材に繋がった経緯がある。ＦＣ町田ゼルビアの話もあったが、元々地域発のクラブチームのため地域活動を積極的に行っており、その中で竹に関わる取組にも参加いただいている。その取り組みもメディアに掲載された。 ●●委員からのご意見について、小山田エリアの拠点施設は農業よりも山林に関する施設だが、小山田エリアにも農家がいるので、農産物の販売に当たっては小野路宿里山交流館程度の規模が丁度良いと考えており、今後検討したい。 ●●委員からは、小山田エリアの拠点施設が、交流回遊拠点として施設来訪者が施設

	へ払うお金の単価をどうするのかというご意見をいただいた。行政が考えるとどうしても広く皆にとって安く、という金額設定になるが、中途半端な金額設定だと魅力がないと思われてしまうので、拠点施設については多少単価を高めに設定しても良いのではないかと思っている。どの様なサービスと料金設定にするかについてはサウンディング調査でも、比較的高めの設定でも良いのではという声ももらっており、ある程度単価を上げないと人が来ないという事は地元からも言われている。 ２０２５年度の検討の中で、さらに調査していきたい。 ●●委員からは、若いライト層をどう引き込んでいくかについてご意見をいただいた。現状中々実現できておらず、主力になっている６０～７０代のシニア層の方々だけでは現場で作業できないという事もある。どうやったら若い世代にも面白いと思ってもらえるかについては、学生やその位の年代の子どもがいるお父さんなどをターゲットにする事も必要かもしれない。２０２５年度には「多摩の森」活性化プロジェクト推進協議会で連携し、そういった体験事業を行う予定である。
・　委員長	拠点施設整備の事業性をどうするか、様々な議論が展開されたのは非常に大きかった。 全体を通してもう一度振り返っておくと、木材活用・事業性ベースでの取り組みはまだ町田の取り組みの中ではあまり展開されてないので、トライアルで色々と展開しながら拠点施設整備に繋いでいく下地作りが、委員からもご指摘のあった施設の規模感など様々な点で必要かと思う。 今までの里山保全の動きは、どちらかというとボランティアベースで回してきた所もあるので、どれくらいの付加価値を持って経済的に回せるかという事にもトライアルしないといけないし、それがターゲティングの話などにも全部絡んでくるのだと思う。 拠点施設の基本計画を立てる前に、少し事業性を見据えたようなトライアルを、具体的に行った方が良いと感じた。 すそ野の広がり・ライト層の参画という話もあったが、いきなりボランティアで入るよりは少し体験とか、お金を払いながらでも取り組みに入っていくきっかけがあった方が良いという事だったかと思う。 その辺りが２０２５年度の大きな要になるということを、ぜひ事務局で受け止めていただきたい。
６．閉会	